觀察

清水光子

鯉幟と武者人形

入園して一ケ月になる此頃はやうやく幼稚園に慣れて、子ども達の氣持も五月晴のやうに爽やかである。五月節供は始めての樂しい行事として印象づけられるものであらう。今日から幼稚園の屋根より高く鯉幟があげられる。あげられたといふ日、みんなに知らせて話合ふ。わたしの家でも、僕の家でも、うちのはまごひが一匹ひごひが二匹よとかうちのはこうだが幼稚園のはかう、といふやうな話合ひのうちにひごひ、まごひの名前や矢車とか吹流しとかいふことを話す、又鯉のやうなお魚の數へ方も知らせる。そして翌日のころに寫生をする。その時どうがするとうつかりと風の方向に拘らず勝手な方に觀念的にかく子どもをみうけるがこれはよく氣をつけてやり、見たまゝをかくやうにすると一しよにみんなにも風がどちらの方から吹いてゐるかといふことを注意させ度いものである。

五日に近い日武者人形を飾る。そしてみんなで見る。これは靜に話し合ひ乍ら、銘々の家にあるのと思ひ比べさせ乍らその名や樣子やどんなものであるかたとへば鐘馗さまのいはれなどを簡單に話してきかせ、斯うして日本では昔から强く立派な日本人になるやうにして來たといふことを知らせ度い。

竹の子

近くに竹やぶがあつていつも親しんでゐ、もう竹の子が出る時分だといふので時々行つてみられたら本當にいゝ。枯葉のかぶさつた土がふわりと盛上つてゐる處を掘つてみるとうす黃色のあたまがみえる。あつた〳〵とあがる歡聲。でも斯うしたことに惠まれない幼稚園が多いがその時は掘つたまゝの竹の子をもつて來てみせることにする。皮をむいたり、それで兵隊さんをこしらへたりマゝゴトに用ひたり、皮のまゝの時寫生したりする。竹は日本、支那の特產であることは常識であるがそれも一寸話してきかせやう。

幼稚園の庭にゐる蟲

自然觀察の材料が他のいつの頃にも增して豐な五月であるがその中でもお庭にゐる蟲は子ども達の爲に澤山のよいものを提供してくれてゐる。これ等の蟲はどれをどうみせるといふやうに一々具體的に說明することはどうかと思ふ、といふのは實に機會捕捉的でなければならないし發展的でなければならないし、臨機應變でなければならないからである。しかもその取扱ひがよくされるとどんなに子どもの觀る心と目を豐にし伸し、喜ばせることかわからない。私達保姆としては「まあ氣味のわるい」と顏をそむけず、けれども危險に注意深く、一しよにみるやうにつとめ度い。こゝに氣をつけねばならないことはともすれば理科的に翅が何枚、足が何本、といふことでなくて動いてゐるまゝを、蟻なら巢の所で働いてゐるまゝを不思議を不思議として、說明をむやみにしたり敎へたりしないことである。

お玉じやくし

まつ黒な小さい、可愛いゝ愛嬌者のお玉じやくし、幼稚園のお池に自然にゐるならば卵の時からずつと注意してみるのによい、が變態(この言葉を敎へるのではない)をよくみせる爲には水盤なり水がめなりに四五匹をとつて保育室で飼ふとよい。が小さい入物に澤山飼ふと失敗する。えら呼吸のうちは水中の酸素がなくなると死んでしまふから。

保育室で飼育するこれが最初のものかも知れないが始めはみんながめづらしがつてどつとそばへたかつてしまひ、結局何もみないでしまふといふことがあるから始めには少しの子どもを順につれて來てそばでゆつくりみることにする。その後は毎日一度は餌をやる時や何かの時にみんなの注意をむけ、今日はどうしてゐるといふことを氣をつけるやうにする。蛙に近くなつたら水盤の中に丘をつくつてやり、知らない中にはね出してしまふことのないやうに覆をして置くことを忘れないやうに。

軍艦

大東亞戰爭が始つてからは一そう軍艦に對してみんなが注意をむけるやうになつた。が海軍記念日に當つて、特に信用のある繪、寫眞を保育室にはつて、種々の軍艦について話合ひ、同時に感謝の氣持をもつて兵隊さんの軍艦生活について話してきかせるやうにしたい。

談話

志村貞子

入園以來一箇月、先生にもお友達にも親しみ、幼稚園の生活そのものを樂しんでゐる毎日です。子供達はお話をするのも聞くのも樂しくてたまらないことでせう。扨てそのお話ですが、今月は「鯉のぼりと雀」「赤ン坊爺さん」「金出ろ銀出ろ」「猿の人まね」「三匹の子豚」「どんぐり小坊主」「三匹の熊」――「改訂版系統的保育案の實際」の中幼稚園談話集所收のもの――となつて居ります。みんなそれ〴〵子供達の樂しく嬉しい心を更に喜ばせるやうな可愛いゝ或は面白いお話だと思ひます。

子供達の心はお話を待つてゐます。素直に、樂しく受け入れるばかりになつてゐます。さうしてお話も用意されてあります。かうなるとあとは話す人次第といふことになりますが、人それ〴〵に持味があるのですからそれをよい方に充分發揮されゝばよいわけです。要するにこの用意されてある雰圍氣に素直に入り得る人であり、更にこれを引立てゝゆき得る人であればよいわけです。話し方の巧拙等よりも何よりもこの「人」が根本だと思ひます。

お話そのものについては特に申上げることもないと思ひますが、二・三氣付いた點を記してみませう。

「鯉のぼりと雀」 これは鯉のぼりのおなかの中に入つて遊んでゐた雀が、鯉のぼりとお話をして仲好しになるといふ可愛いゝお話です。